

## 「自律学習能力の育成を図る教室活動」

衣川隆生(名古屋大学准教授)

### 「自律学習能力」とは

「自律学習」と聞くと、教室外の学習活動や個別カリキュラムを連想される方も少なくないと思います。しかし「自律学習」とは「学習の内容や方法を自分で選択して計画を立て、その計画を実行して成果を評価する(青木, 2008)」学習活動であり、教室活動として行うこともできますし、コース・カリキュラムに組み込むことも可能な学習活動です。例えば口頭発表技能の育成を目的としたコースを想像してみてください。そのコースに在籍する学習者が抱える課題は様々です。ある学習者はイントネーションに課題を抱えているかもしれません。またある学習者は発表の構成がうまく考えられないかもしれません。同じコースに在籍する学習者であっても自分の課題に気づくことができれば、その課題を解決するための学習内容、学習方法を選択し実行することができます。前者はイントネーションを改善するための学習計画を立てその計画に沿って学習を進め授業に挑むかもしれませんし、後者は発表の構成に注意しながら原稿を準備し発表に取り組むかもしれません。このようにコースに在籍する学生が画一的な到達目標に向かって学習するのではなく、一人一人が抱えている課題を解決できるような到達目標を立てそれに向かって学習する活動も自律学習だと言えます。ここでは中上級日本語学習者の口頭発表技能の育成を目的としたコースを例として取り上げ、自律学習の前提となる「自分の課題を見極める」力を育成する教室活動をご紹介します。

### 「自律学習」の四段階

「自律学習能力」は以下の四段階を繰り返し体験することで育成されると考えられています。

1) 学習者が学習経験や学習環境、自身の言語能力や学習ニーズなど学習に関わる様々な要因を客観的な視点から意識化する段階、2) 意識化によって得られた情報をもとに具体的で実現可能な形で到達目標と学習計画を立案する段階、3) 学習計画を遂行し、その遂行状況を第三者的な視点でモニターする段階、4) 学習結果の評価を行い、その評価結果に基づいて到達目標や学習計画をより効果的で実行可能なものに変えていく段階。最初の意識化というのは「私の発表の時にはみんな退屈そうだ。話し方が単調かもしれない」のように学習者自身の課題を意識する段階です。次は課題を解消するために「メリハリのある話し方を身につけよう。そのために原稿に強調やポーズの印を付けて練習をしよう」と到達目標と学習計画を立案する段階です。そして、学習計画に基づいて練習をして教室での発表に挑みます。発表は後でモニターできるようにビデオに録画します。そして最後にビデオを見ながら「強調はよくなったが、ポーズはまだだ」のように学習結果の評価を行い、その結果に基づいて「ポーズを有効に入れた話し方を身につける」などの新し

い到達目標と学習計画を立案します。

### モニタリングの観点と基準の確立

では、どのようにすれば学習者に「意識化」、「計画立案」、「計画遂行」、「評価」の四段階を繰り返し体験させることが可能となるのでしょうか。学習者の発表をビデオに録画し、そのビデオを見て良かった点、直すべき点を評価し、その結果に基づいて自分の課題と目標を意識しなさい、と指示を出せば可能になるのでしょうか。または「話し方」、「態度・礼儀正しさ」、「内容」、「構成」のような評価基準をあらかじめ示し、それに従ってお互いに評価しなさい、という指示ではどうでしょうか。残念ながらどちらの指示を出したとしても「よかったです」、「おもしろかったです」などの印象や「促音がわかりにくい」などの微視的な観点からの評価しか出てこないことが多いです。その原因として発表を第三者的な視点でモニターし評価するときの「モニタリングの観点」が確立していない、または観点は確立していても、それぞれの観点で評価を行う際に比較対照すべきモデルのイメージが確立されていないことが考えられます。例えば「ゆっくりわかりやすく話していたか」という観点が示されていても「どのようなスピードでどのような抑揚を使って話すのがわかりやすい話し方か」という具体的なイメージがなければ比較対照し評価することはできません。

では、どのようにすれば「モニタリングの観点」、「モニタリングの基準」を確立することができるのでしょうか。具体的な方法としてはいろいろ考えられますが、「観点」や「基準」を際立たせ、それらに気づきやすくする課題を課すことが大切だと思います。例えば「態度・礼儀正しさ」に関わる「観点」や「基準」を際立たせる方法として、アイ・コンタクトや身振りを上手にを使って発表している発表例と原稿を読むことに没頭している発表例を「音声を消して」観察させる方法が考えられます。どちらの発表の方がわかりやすいと思うか、それはなぜかを学習者がグループで話し合うことによって、「態度・礼儀正しさ」が発表をモニターするときの「観点」として重要であること、そして「文が終わったら必ず聴き手とアイ・コンタクトをして理解を確認する」、「いくつかある項目を紹介するときには指で数を示しながら紹介する」のような具体的な事例を「基準」として確立することが可能になります。また「発表の構成」や「話し方」に関わる「観点」、「基準」を確立させる方法としては、発表を聞いてメモを取る方法が考えられます。他の学習者のメモを取り、その取りやすさ、取りにくさの原因を話し合うことで、「発表の構成」や「話し方」が「観点」として重要であること、そして「キーワードは何度も繰り返す」、「メモをとってもらいたいキーワードとキーワードの間にはポーズを置く」、「一つの話題の始まり、終わりにはまとめを言う」などの具体的な事例が「基準」として確立されることが期待できます。

## モニタリングの基準の意識化

「モニタリングの基準」が確立されたら、その基準で自分の発表を評価し、その結果に基づいて「自分の課題を見極める」ことが求められます。その前提として「モニタリングの基準」が箇条書きのようにバラバラに記憶されているのではなく評価表の項目のように分類、整理されていること、そして、それらの基準を意識しながら発表を行うことが必要です。この二つの前提条件を満たすために私は「いい口頭発表とは＝発表の評価基準」を発表のテーマとしてコース・カリキュラムに組み込んでいます。ヴィゴツキー(2001)は知識を単に記憶するだけの死んだ知識にせず、適用できる生きた知識にするためには、その知識を自分の言葉で説明してみることが重要だと指摘しています。「いい口頭発表とは」というテーマは自分の言葉で「モニタリングの基準」を聴き手に説明するテーマだと言えます。準備の段階で学習者は「モニタリングの基準」を意識できるレベルまで引き上げなければなりません。そして、聴き手に理解してもらうために、意識された基準を分類したり順序づけたりするかもしれません。さらに、聴き手の反応に応じて内容を細分化したり再編成したりする可能性もあるでしょう。このように自分のことばで「モニタリングの基準」を説明することで不明確だった部分や矛盾している部分に気がついたり、知識やアイデアの統合、再編が引き起こされると考えられます。また「いい発表とは」を発表している間は常に「モニタリングの基準」を作業記憶上に引き出しておかなければなりません。それはとりもなおさず「モニタリングの基準」を意識しながら発表を行うことに繋がります。つまり、話す内容とする作業自体が「モニタリングの基準」の意識化となりモニタリングを促進することも期待できます。発表後には、自分の発表内容から口頭発表の評価基準を抽出し、その基準に基づいて自己評価、他者評価を行います。このような作業を繰り返すことにより、学習者は徐々に「自分の課題を見極める」力を身につけ、そしてその課題を解消するための次回の発表の目標設定を行うことができるようになると考えられます。

## 参考文献

青木直子(2008)「学習者オートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』vol. 56, No. 12, 大修館, p. 10-13.

ヴィゴツキー, L. S. (2001)「新訳版・思考と言語(柴田義松(訳))新読書社.

衣川隆生(2009)「メタ認知知識の外言化がもたらすもの-モニタリングの基準の意識化と内在化を目指して-」『日本語教育の過去・現在・未来 第3巻 教室(小林ミナ・衣川隆生(編著)水谷修(監))』凡人社, p. 69-93.